

反復と変奏

糸藤 隆弘
デザイン学科

Repetition and Variation

ETO Takahiro
Department of Design

実験の場としてのポスター

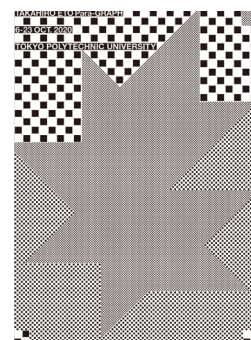
ポスターは、ビジュアルと文字を一枚に構成してメッセージを伝えるメディアだが、デザイナーにとって表現の限界を探る場としての側面もある。国際的なポスターコンペが今も盛んに行われる背景には、このようなポスターの特性があると考えられる。私にとっても、ポスターは視覚的かつ概念的な探求の場であり、自主的な制作を学生時代から継続している。これらのポスター制作は無菌室での実験に似ている。例えば、物質AとBの反応を観察するためには他の干渉要因を取り除く必要があるように、私がポスターを制作する際には、制作者の身体性やアナログ手法による偶然性、モチーフの意味や文脈などを極力排除し、一つの造形的アイデアのみから作品が成り立つように留意している。

テーマとしての反復と変奏

植物の葉や枝、海岸線の入り組んだ輪郭や等高線などの形には、規則性が見られるが同じものはひとつとない。樹木の枝分かれや葉脈の分布は、全体の形状を縮小したような構造が部分に再現される自己相似性を示す。このような自然界に見られる自己相似性や反復構造に私は興味があり、これらを視覚表現に転用することで、無機的な手法でありながら有機的で豊かな表現を実現できると考えた。この方針に基づいて2020年頃から「反復と変奏」をひとつのテーマとして制作している。

手法としての反復と変奏

あるエレメントを反復して配置するとパターンが現れる。配置の仕方を変えれば新しいリズムが生まれる。反復はごく単純な操作ながら多彩な出力が可能なところに魅力を感じている。例えば、2020年に制作したポスター《Para-GRAPH》では、正方形のドットのみを用いて画面を構成した。画面全体が同じ濃度になるため、遠く離れて見るとフラットなグレーの面となりモチーフは見えなくなるが、実際にはドットの肌理の違いで図像を認識できる作品となっている。反復によって同一性や秩序が生まれる。それだけでは退屈だが、そこに変奏が加わることによって差異や自由が生まれる。この時期の一連の制作を通じて、物事が「同じでありながら異なる」あり方には、固定的で不変なものを超えた流動的な本質があるのではないかと、との考えに至った。



糸藤隆弘《Para-GRAPH》2020年

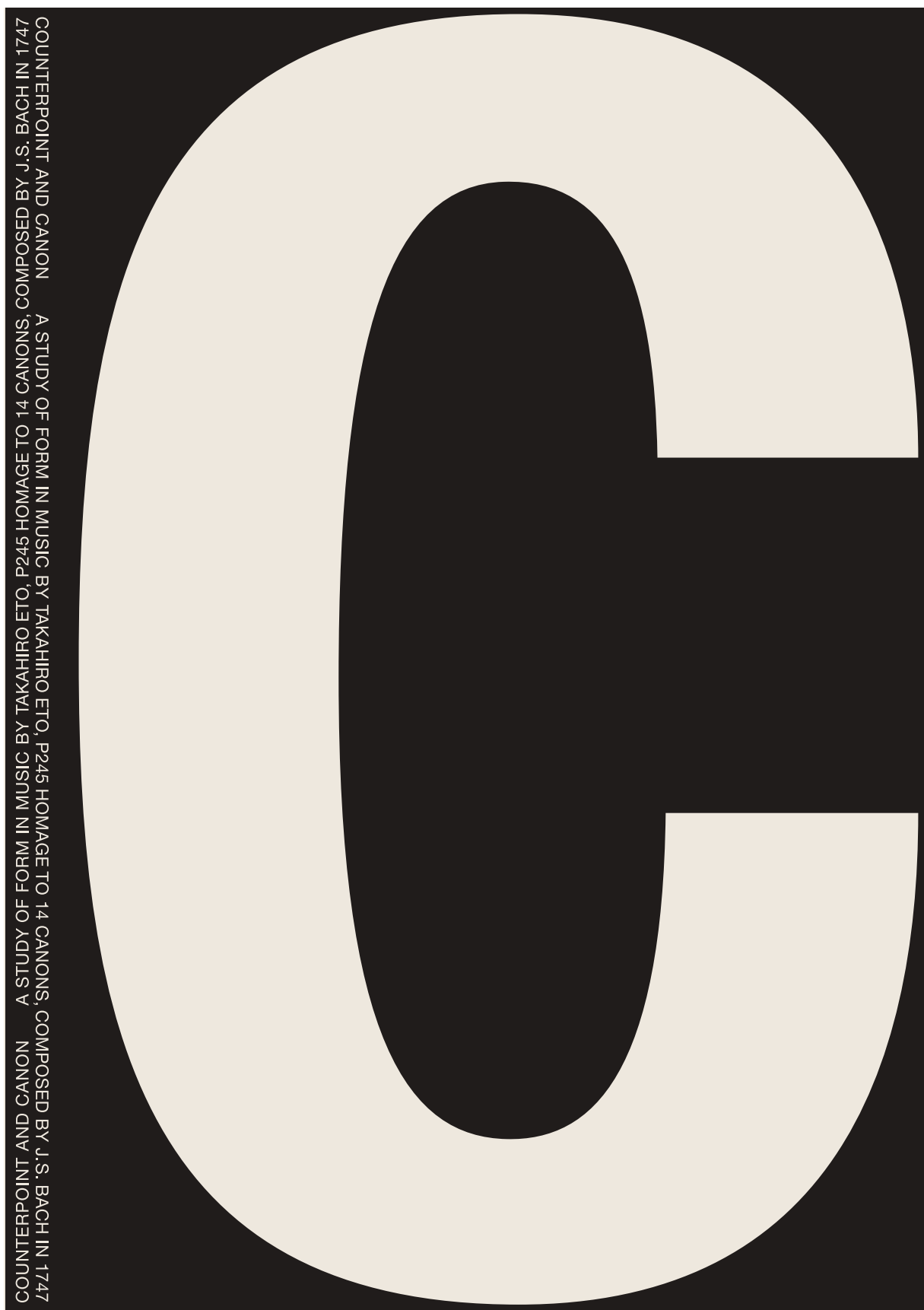


図 1

Counterpoint and Canon_Element

《Counterpoint and Canon》シリーズの基本となるポスター。

Counterpoint と Canon の頭文字である「C」をモチーフとしている。



図 3

Counterpoint and Canon_Theory_line

面を線に置き換え、加えて不透なポスターと透過するポスターを組み合わせ、重層性を強調した。



図 4

Counterpoint and Canon_Basic_plane

基本となるポスターの縦横比率を変更し、より動きを感じさせることを試みた。
操作の制限を緩めた代わりに、ポスターの回転はしないこととした。

作品《Counterpoint and Canon》について

本研究および作品は、《Counterpoint and Canon》と《反復と生命》の二つのシリーズから構成される。《Counterpoint and Canon》は、J・S・バッハへのオマージュとして制作したもので、複数の旋律が独立性を保ちながらも調和し重なり合う「対位法（counterpoint）」に着想を得ている。輪唱のように、基本となるポスターを複数枚重ねることによって一枚のポスターを構成した（図2）。この作品は単純な反復手法だが、その後、変奏として線の表現や縦横比率の変更などを行い、バリエーションとしてのポスターを制作した（図3、図4）。基本となるポスターに最小限の操作を加えることで、仕上がりに大きな変化を生み出すことを試みている。

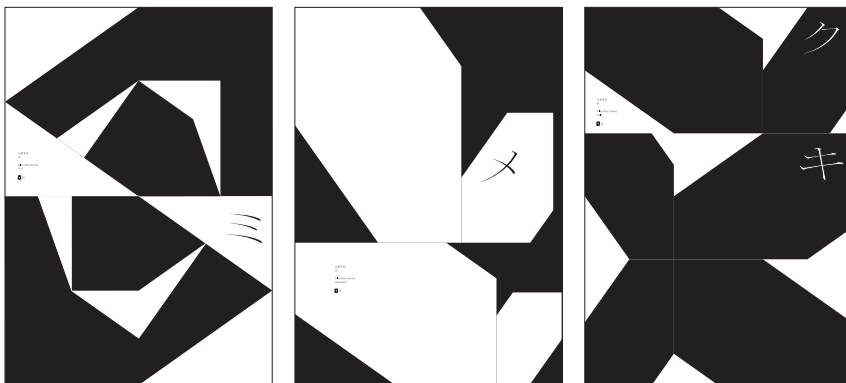
作品《反復と生命》について

《Counterpoint and Canon》シリーズでは、図と地の関係性に明確な主従関係が生まれる点が課題であった。具体的には「C」の文字が図となり、それ以外が地として視覚的な優先順位が生じてしまい、見え方が単調になってしまう。そこで、次のシリーズ《反復と生命》では抽象形態を用いて図と地が曖昧になるように基本となるポスターを制作した。これらの作品は、初見では一つの大きなモチーフとして認識されるが、鑑賞する中で、複数の同一デザインが重ねられていることが明らかになる。なお、本作の基礎となったのは 2022 年度に制作した《白銀草図》である。白銀比の自己相似性を活用し、幾何学的な形状配置によって植物のような有機的表現を試みたが、あまりに単純な手法のため視覚的効果が予測の範囲を出なかった。そこで次への展開が求められ、本作の制作に至った。白銀比を基にした形状や構成である点は《白銀草図》と共通するが、《反復と生命》では一つのポスターが別のポスターの上に重なり、覆い隠すことによって、図と地が入り混じる視覚的な複雑さを実現している。

活動としての反復と変奏

「反復と変奏」は一枚のポスターを作る上での造形的な手法でもあるが、継続したテーマでポスターを制作すること自体が「反復」であり、試行錯誤しながら少しずつ作品を変化させることが「変奏」と捉えることもできる。よって、私にとって「反復と変奏」はテーマであり、手法であり、活動方針でもある。今後も本作で発見した構成法を探求し、変奏を続けることで大きな飛躍が生まれることを目指して制作を継続してゆく。

また、制作活動と並行して、他者の作品や表現手法における反復が持つ役割や意義についても考察を深め、これを自身の制作に還元することで、さらなる創造的展開を目指したいと考えている。



え 藤隆弘《白銀草図シリーズ》2022 年



反復と生命_芽 P2422
841x1189mm
Inkjet printing

本作は、ひとつのホスター（原型）より全体が構成される。
この秩序が、部分の「池」が全体の「図」になる過程を、有機的な運動をむ。
基調は、様々な形状と関係なく「グラフィック」が自律しうると考える。
その美として、ひとつのホスターで作品を成立させる試みを続けており、
本作は2022年制作の「白銀草図」の発展的作品である。

反復と生命 Repitition and Life

久藤隆弘
Takahiro ETO, 1981-

久藤隆弘
Takahiro ETO, 1981-

反復と生命 Repitition and Life

本作は、ひとつのホスター（原型）より全体が構成される。
この秩序が、部分の「池」が全体の「図」になる過程を、有機的な運動をむ。
基調は、様々な形状と関係なく「グラフィック」が自律しうると考える。
その美として、ひとつのホスターで作品を成立させる試みを続けており、
本作は2022年制作の「白銀草図」の発展的作品である。

反復と生命_芽 P2422
841x1189mm
Inkjet printing

久藤隆弘
Takahiro ETO, 1981-

反復と生命 Repitition and Life

本作は、ひとつのホスター（原型）より全体が構成される。
この秩序が、部分の「池」が全体の「図」になる過程を、有機的な運動をむ。
基調は、様々な形状と関係なく「グラフィック」が自律しうると考える。
その美として、ひとつのホスターで作品を成立させる試みを続けており、
本作は2022年制作の「白銀草図」の発展的作品である。

反復と生命_芽 P2422
841x1189mm
Inkjet printing

図 5

反復と生命_芽

《白銀草図》に比べると、有機的で動きのある印象や、意外性のある形態が生み出されている。



図 6
反復と生命_花

図5では3枚のポスターを、この図6では4枚のポスターを組み合わせる一つのポスターを作り上げている。